

東京バッハ合唱団 月報

[第 708 号] 2021 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.708

Jun 2021

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

創立 60 周年記念の選曲に思う

バッハのカンタータとどのように取り組めば？

大村 恵美子 (主宰者)

200 曲もある J. S. バッハのカンタータを、さてどのような順で聴いて学ぼうか、と考えるとき、たいていは、ポピュラーな評判の高い数曲を先ず意識して聴き直し、さらに推薦者の多い作品にとりかかります。

私は、バッハ自身の歴史にも興味があったので、やはり作曲年代の初めから、順を追って識ってゆきたいと思いましたが、当時の日本の楽壇では、バッハのカンタータは、まだそれほど知られていなかったため、合唱団の組織を育てるためには、次々と「どれもみんな、いいな」と、団員に受け入れやすくしなければならず、明るく元気で、歌うと生きる勇気を与えられるようなものを、中心にとりあげていました。

最近、来年の創立 60 周年を記念するための選曲アンケートが、団員を対象になされ、私も回答を拝見しましたが、皆さんさすがに、たびたび再演したい、密度のある名曲を挙げてくださいました。

創立 50 周年の頃には、もう前向きな明かるい名作は殆どとり上げ尽くし、あとは、どちらかと云えば、苦悩や死への諦念とか、何か月もかけて課題曲にすると、その間、気が重く、厭世的にさえるのかも、と、少し心配したことがありました。

ところが、これが J. S. バッハの規模の大きいところで、そういう重さに面するような内容でも、例えば、数年前に行なわれた定期演奏会 [今の異常な事態で、これが直近になっています (2019 年 5 月、第 118 回)] の会場アンケートでも、「このようなカンタータが、今の私には、まるで自分のために作られたかのように、心の奥にぴったり寄り添う感じで、とてもうれしかった」というような、感想の言葉が多くの方々から寄せられました。そう、バッハの作品は、どんなに人生の重荷を扱ったものでも、それを聴くと、音楽で救われ、心が軽くなる効果があるのです。



■千葉寫真館
アジサイ
(撮影・千葉光雄)

半世紀以上たって、まだまだ数十曲も手のつかないものが残されており、今後は心に沿わないものも取り上げるの？ となるのではなく、どれも歌い込んでみると、自分たちには想像もつかなかったような収穫が与えられる感じです。人生は豊かで力強く、明るだけでなく、翳りの濃い、悲しみに蔽われた場面でも、バッハの音楽で、私たちは、生きるのを楽しむことができるのです。

60 年も歌ってきて、まだまだ飽きないで歌い続けるというのは、何と恵まれた道かと、われながら、幸せ一杯でありがたく思っています。

「バッハ・カンタータの情景」

—— 作曲アイディアの素材から見渡してみる

復活節の情景 (3)

- ・BWV 104 《牧人主よ きけよ》復活節後 第 2 日曜日用
- ・BWV 166 《いずこへ 主よ 行きたもう》第 4 日曜日用

今回は、復活節後の第 2、第 4 日曜日のために作曲された作品 (BWV 104, BWV 166) を紹介します。

いずれも、バッハのライプツィヒ初年次の曲で、これまで取りあげた作品の成立時期との関連でいうと、既述のとおり (前号 p. 3) 《ヨハネ受難曲》第 1 稿の初演 (1724 年 4/7) 後、毎週の新作ペースへの復帰が BWV 67 《留めよ心に 主イエスを》をもって開始されますが、今回の 2 作とも、初演作としては、それにすぐにつづく週に位置づけられます。

- ・4/16 (復活節後第 1 日曜日) …BWV 67 [前回とり上げ]
- ・4/23 (同 第 2 日曜日) …**BWV 104**
[・4/30 (同 第 3 日曜日) …BWV 12 (再演、1714 年ヴァイマル初演)]
- ・5/7 (同 第 4 日曜日) …**BWV 166**

これら隣り合った仕事を味わってみることで、バッハの創作の機微に触れられるかも知れません。各曲で確かめてみましょう (大村健二)。

月報 2021 年 6 月号 CONTENTS

- ・連載：退屈するのはいそがしい [4] (大野博人) …p. 4
- ・バッハ・カンタータの情景、復活節の情景 (3) ……p. 1
- ・主宰者の卒寿と団の還暦を寿ぐ (伊東浩史) ……p. 3

■カンタータ第 104 番《牧人主よ 聞けよ》

Du Hirte Israel, höre BWV 104

【教会暦】復活節後第 2 日曜日 (Misericordias Domini) (他に BWV 85、112)

【使徒書】I ペトロ 2, 21-25 (イエス、迷える羊の牧人)

【福音書】ヨハネ 10, 12-16 (良き羊飼い)

【成立】初演 1724 年 4 月 23 日 (ライプツィヒ聖ニコライ)

【歌詞】作者不詳。1) 詩編 80, 2。6) ベッカーのコーラル Der Herr ist mein

getreuer Hirt (主はわが頼めるまことの牧人) 1598 年 (詩編 23 篇による)

【BCH-25】第 1 節、旋律: Allein Gott in der Höhe sei Ehr (高きには栄え) 1539

年【BCH-9】(10 世紀の復活祭ミサのグローリア旋律による)

【上演用訳詞】大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv104.htm>

【編成】TB、合唱、ob2、oba2、taille (obc で代用)、str、bc

【楽曲構成】	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成/調
1. 合唱	牧人主よ きけよ Du Hirte Israel, höre	Ob2, obc, str, bc ト長調
2. レチタティーヴォ(T)	主 われをかえりみ Der höchste Hirte sorgt vor mich	bc
3. アリア(T)	わが牧人 いまさずば Verbirgt mein Hirte sich zu lange	Oba2, bc 口短調
4. レチタティーヴォ(B)	ああ 言葉はわが魂のまことの糧(かて) Ja, dieses Wort ist meiner Seelen Speise	bc
5. アリア(B)	幸なる主の群れ Beglückte Herde, Jesu Schafe	Oba2, str, bc 二長調
6. コーラル(合唱)	主はわが頼める まことの牧人 Der Herr ist mein getreuer Hirt	Ob2, obc, str, bc イ長調

(演奏時間 18 分)

【上演履歴】1963 (#2)、1964 (#4)、1972 (#25)、1994 (#75)

【日本語版楽譜発行】2002 年「50 曲選」、ISBN978-4-925234-23-4 (¥1600)

【録音】CD「50 曲選」Vol. 13 (1994 年録音、#75)

復活節後第 2 日曜日の主題聖句は、「私は良い羊飼いである。私は自分の羊を知っており、羊も私を知っている」(ヨハネ 10:14) です。

この主題に導かれて、舞台はのどかな牧歌の場景であり、カンタータ全体をパストラレの樂想が満ちて、多くのファンを喜ばせています。

冒頭合唱(上演用訳詞、以下同様)は、

牧人(まきびと) 主よ きけよ
ヨセフを 羊のごと守る者よ
み光放て 高きにいます者よ

と歌いますが、出典は、旧約の章句(詩編 80:2)です。主は、「イスラエル」を導き、ヨセフ(民を大飢饉から救った)を守る(主)であり、その主にむかって呼びかけています。ドイツ語原詞で聴く人の耳には、この「イスラエル」が何度も何度も響くことになります。もちろん、上演用訳詞にあたっては、音節数の制約のなかでの仕事ですから、何かを省かねばならない場合も生じてきます。われわれの訳詞演奏では、その「イスラエル」が省かれました。何をもって本質とするかという、重大な決断です。

母語で、こころに、直切訴えるというのは、この手の直観の作業にならざるを得ませんが、ここでは、見事に普遍にむかって開かれたのであり、成功しているのではないのでしょうか。‘今’(2021 年 5 月)のイスラエルの原野、(高きにいます者)の眼下、を飛び交うのは天使(ケルビム、原詞参照)、それとも?

第 3 曲(テノール・アリア)は、迷える仔羊の心境で「荒野は おそろし」と歌います。2 本のオーボエ・

ダモーレと通奏低音は、心細い歩みの描写。

第 4、5 曲(バス・レチタティーヴォとアリア)

つづいて、バスが〈善き牧人 主よ/なが牧場にみちびき/憩わせたまえ〉と訴え、ふたたびパストラレの樂想にもどって、アリアを歌い始めます。

幸なる 主の群れ

なれらに この世は 天(あま)つみ国

音楽は、弦 3 部の高声部をオーボエ・ダモーレが補強して進み、〈天つみ国〉の場景を現出させています。こんな名曲を歌えるバスがうらやましいですね。

作品を閉じるのは第 6 曲、ベッカーのコーラル。

主は わが頼める まことの牧人

緑の牧場に 羊をみちびき

みぎわに憩わせ わが魂を清む

み恵みをもて

いわゆるドイツ語グローリア(高きには栄え)の旋律ですから、耳に親しい方も多いでしょう(「讚美歌 21」37 など参照)。

親しみやすい主題聖句といい、田園詩風な舞台設定のなかでの、憧れと慈愛に満ちたアリアの連なりといい、そして説得力に溢れた単純な 4 声体での終結、パツハファンの心を惹きつけてやまない要素が山盛りの、大好きな 1 曲です。

■カンタータ第 166 番《いずこへ 主よ 行きたもう》

Wo gehst du hin BWV 166

【教会暦】復活節後第 4 日曜日(Cantate) (他に BWV 108)

【使徒書】ヤコブ 1, 17-21 (すべての良き賜物は上から)

【福音書】ヨハネ 16, 5-15 (キリストは行くが、慰め[弁護者]が来る)

【成立】初演 1724 年 5 月 7 日 (ライプツィヒ)

【歌詞】作者不詳。1) ヨハネ 16, 5。3) リングヴァルトのコーラル Herr Jesu

Christ, ich weiß gar wohl (定かにわれ知る) 1582 年【BCH-54】第 3 節、旋律:

Herr Jesu Christ, du höchstes Gut (イエス 高き宝)【BCH-52】。6) シュヴァル

ツブルクールードルシュタット伯爵夫人エミリーエ・ユリアーネのコーラル

Wer weiß, wie nahe mir mein Ende? (わが終わり来たるや) 1688 年【BCH-143】

第 1 節、旋律: Wer nur den lieben Gott läßt walten【BCH-142】

【上演用訳詞】大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv166.htm>

【編成】ATB、合唱、ob、str、bc

【楽曲構成】	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成/調
1. アリア(B)	いずこへ 主よ 行きたもう Wo gehst du hin?	ob, str, bc 変口長調
2. アリア(T)	み国を思いて Ich will an den Himmel denken	ob, vn ソロ, bc ト短調
3. コーラル(S)	主に願ひもとむ Ich bitte dich, Herr Jesu Christ	str, bc ハ短調
4. レチタティーヴォ(B)	雨水(あまみず)も 流れ去り Gleichwie die Regenwasser bald verfließen	bc
5. アリア(A)	こころせよ 幸(さち)微笑まんとも Man nehme sich in acht	ob, str, bc 変口長調
6. コーラル(合唱)	わが終り来たるや 知るはただ主のみ Wer weiß, wie nahe mir mein Ende!	ob, str, bc ト短調

(演奏時間 17 分)

【上演履歴】2018 (#118)

【日本語版楽譜発行】2018 年、ISBN978-4-925234-82-5 (¥1800)

【録音】(市販品なし)

前曲(BWV 104)で、牧者を見失った迷える子羊の不安に触れました。今回の作品は、むしろ、「今私は、

私をお遣わしになった方のもとに行こうとしている。それなのに、あなたがたのうち誰も、『どこへ行くのか』と尋ねる者はいない」（ヨハネ 16：5）、というイエスの、弟子たちの無理解の指摘と慰めの到来の告知が主題になっています。そして、ご覧のとおり、その言葉の中でのイエス自身のせりふ「どこへ行くのか」が、曲の歌い出し、すなわち曲名になっています。

以下、東京バッハ合唱団第 118 回定期（2018 年）のプログラム解説（拙文）を一部再掲します——弟子たちとともにエルサレムに向かう途上、イエスは来たるべき迫害と受難をなんども予告していますが、彼らは悟らない。同じ福音書の前の箇所では、ペトロが「主よ、どこへ行くのですか」と尋ねていました（ヨハネ 13：36）。ペトロは、命を捨ててでも従うと言明するのですが、イエスの答えは、受難曲でもお馴染みの「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」でした。ラテン語訳の『クオ・ヴァディス・ドミネ（主よ、どこへ行くのですか？）』が小説の表題になり、そのフィクションのなかでは、迫害のローマを逃げ出すペトロが、アッピア街道上の幻のイエスにむかって発する問いが、この句でした。

——独唱バスがこの句を、頼りなげに歌い出して、曲が開始されます。〈いずこへ〉の問いは、人間一人ひとりの人生にむかって発せられています。第 2 曲はテノールと管・弦によるアダージョのトリオ楽章。陰りをおびた旋律の流れのなかで、テノールの歩みはいまだに迷いを脱しません〈おお人よ、赴くやいずこへ〉。次のソプラノのコラール編曲へとつづく内面的な美しさは、バス叙唱の訓戒を経て、アルト・アリアの陽気なメヌエットへと至ります（第 5 曲）。ただし、〈心せよ、さち微笑まんとも〉。そして、意味深い終結コラール（第 6 曲）。——

このコラール「わが終り 来たるや」は、バッハ好みの讚美歌だったようで（データ欄参照）、他に BWV 27（第 1 節使用）と BWV 84（第 12 節使用）でも用いています。これまたバッハ偏愛のゲオルク・ノイマルク（1621-1681）の有名な旋律「ただ主に依りたのみ *Wernur den lieben Gott läßt walten*（かつては「尊き御神の統べしらすまに纏（まつ）ろい」の大時代な訳も有名でした）」に乗せて、人生の終りへの憧れを、淡々と歌うのです（BWV 93 参照）。弦合奏にオーボエ 1 本という小さな楽器編成ですが、かえって印象に残る一作です。

ところで、前述したように、この年（1724 年）の春、



■千葉寫真館
バラ（カクテル）
（撮影・千葉光雄）

バッハは《ヨハネ受難曲》の創作に渾身の力を注ぐため、前後では省力し、復活節後の日曜日にいたってようやく、本日の 2 作や前回の BWV 67 をつづげざまに創作したのですが、それまでは旧作の再演や改作で、カントルの職務をしのいできたのでした。

……そして、聖霊降臨節の大祝祭日と三位一体節は目前です。ひと月後には、バッハの一大プロジェクト「コラールカンタータ年巻」が始まります。構想は、すでに固まっているように見受けられます。

大村恵美子さんの卒寿と合唱団の還暦を寿ぐ

伊東 浩史（セラピスト、整形外科医院勤務）

去る 3 月 9 日、東京バッハ合唱団を主宰する大村恵美子さんが卒（卒）寿、90 歳を迎えられました。

大村さんは、旧満州は新京（現・长春市）でお育ちになり〔誕生は兵庫県西宮市〕、東京芸術大学楽理科と作曲科をご卒業。先日お聞きするには、楽理科で音楽を学問的に考察した後、さらに深く知るために作曲科に入り直したそうです。すばらしい向学心。しかも、いくつかの高校で教鞭をとりながら、教師と学生を両立させていたそうです。

その後、フランスのストラスブール音楽院およびストラスブール大学で作曲、指揮、音楽学を学ばれ、在学中よりバッハのカンタータ演奏を志します。留学中の 1960～1961 年、日本から運んだ、発売間もないホンダスーパーカブに乗って、ヨーロッパ中を旅したそうです。留学を終えると同時に 1962 年東京バッハ合唱団を創立。31 歳のときでした。

いっぽう、大村さんの視線の先にある、当の音楽家バッハは、22 歳の若さで、《神の時は いともただし》（カンタータ第 106 番）のような深い作品をもって世に出ました。大村さんは、バッハがその音楽で取り上げた、人間が遭遇する広大な領域の森羅万象の題材を、日本人にわかるように原典を活かしながら大胆に和訳されています。「神の時は いともただし/主に生き はたらき/われら あるなり/みこころのままに 定められたるとき/われら死す」（第 106 番・第 2 曲の上演用詞訳）

1983 年ドイツ民主共和国（当時の東ドイツ）芸術公団の招聘により、東独 4 都市での公演を行ない、とくにバッハが後半生を送ったライプツィヒ聖トマス教会では、わが国の合唱団として初の演奏となりました。この旅の後半は、壁を越えて西側へ移動、ヘルムート・リリング主宰バッハアカデミー（西独・シュトゥットガルト）、フランス・ストラスブール改革教会、テゼ共同体でも演奏。冷戦下において、東ドイツの官招聘を受けた光栄には、歴史的な重みさえ感じます。

その後も数回のヨーロッパ巡演をかさね、2009 年、合唱団揺籃の地・ストラスブールを再訪、カトリックのフライブルク大聖堂日曜ミサで客演、シュトゥットガルトではパウロ教会で同聖歌隊と合同演奏、等のひと夏を経て今日にいたっています。

こちら、東京バッハ合唱団は、来年で創立 60 周年を迎えるそうです。想像できない長さです。聖書には、人の寿命は 120 年とありますが（創世記 6：3）、大村さんの気丈さには、それに迫る勢いを感じます。

末筆ではございますが、東京バッハ合唱団の更なるご発展と、大村恵美子さんの益々のご健勝をお祈りします。

鏡となった安曇野

大野 博人 (安曇野閑人)

5月、安曇野は鏡になる。

田植えに向けて市内に広がる田にいっせいに水が注ぎ込まれるからだ。北アルプスの雪解け水は、あぜ道に咲く花や農作業の人々、付近の家々、そして何よりも自らの源である3000メートル近い山々をあざやかに映し出す。水面を風がわたると、青空に映える頂上付近の残雪も、さざなみに揺れる。

ここでは、季節がバッハのフーガのように移っていく。

気温が零下になる日々が続く冬。葉を落として黒っぽい幹と枝ばかりの木々と雪の白だけだった風景に、ある日クロッカスの花が咲き、紫やオレンジなどの色彩が現れる。さながら静まりかえったコンサートホールで、序奏も伴奏もなく旋律を奏で始める木管楽器だ。なにかが始まる気配。

その旋律をスイセンの黄色が受けつぐ。さらにスミレやムスカリ、菜の花、サクラが次々と追いかける。木々の新緑も加わる。あたたかみを帯びはじめた日の光に輝きながら色を深めて、花々と重なり合う。

聴く者の頭の中に色彩をちりばめる音楽があるように、音楽が聞こえてくる風景がある。

その音楽が一つのクライマックスをむかえるころ、水田が鏡となる。

往年の名チェリスト、ポール・トルトゥリエは、チェロの広い音域を大きく上がり下がりするバッハの無伴奏組曲第4番のプレリュードの譜面を示しながら、こんなことを語っていた。「ほら、これは偉大な山々の連なりなんですよ」。

だとすると、雄大な山脈の稜線の上り下りと、それを反転して見せる鏡像は、「フーガの技法」で聴く者を

■鏡となった安曇野 (筆者撮影)



不意打ちする「鏡のフーガ」なのだろうか。

どんどん変化していくそんな風景の魅力を、なんとか記録に残せないかと思う。けれども、私には、絵を描いたり、詩を作ったり、作曲をしたりする才能がない。悲しいかな、スマホで写真を撮るくらいだ。

ここに住み始めたとき、軽自動車が必要になり販売店を訪ねた。地元で生まれ育った支店長は、私たちが都会からの移住者と知ると、安曇野で欠かせない車の装備や使い方についてていねいにアドバイスしてくれた。そして楽しそうにこう続けた。

「都会から移住した人の中には、おもしろい方がいらっしゃるんです。ご自宅の庭に三脚立てて山の写真をいっぱい撮るんですよ。そんなことしなくても、山なんて、窓を開ければ毎日いつでも実物を見られるのに。おかしいですね。あはは」。

「あはは、たしかにおかしいですね」と同調しながらぎくりとした。

私も、雪が積もったと言ってはパチリ、紅葉したと言ってはパチリ、山にかかる雲がきれいだと言ってはパチリ、安曇野が鏡になったと言ってはパチリ……。

風景に感動しても、チェロに託せるほどの技量もセンスもない私はポケットからスマホを取り出すだけ。しかも三脚も立てずに。

見透かされている……。それでも、今日も何度もパチリとやってしまった。

退屈したくて安曇野に来たはずが、ちっとも退屈できない。

◆筆者は、当合唱団の長年の後援会員・団友。元朝日新聞記者、ヨーロッパ総局長など、おもに外報畑で超多忙な要職を歴任され、昨年退職して信州に移住した。これを機に、随時、山中の暮らしのあれこれなど、ご自由にご寄稿いただくこととした。写真提供も。

編集後記

上掲「連載随想」の筆者・大野氏は、1970年代後半の「カフェハウス・バッハ」で、後に奥様になられる朗子さんと揃ってのご常連でした。お二人とも学生オケのメンバーで、朗子さんはヴィオラを、博人氏はチェロをお弾きになっていらした。何十年もむかし……。

安曇野暮らしに移って、またチェロの腕を磨きはじめたと伺っていたが、今回は、その一端に触れさせていただいたような懐かしさです。

またまた都の緊急事態宣言、あるいはその延長だったか、いやマンボー？で、練習会場の使用不可、団員も外出自粛となり、練習が休止になってしまいました。もう何度目なのか分からなくなるほどです。

こんななか、安曇野にぼっかり開いた窓があって、私ども都会暮らしの面々も、思う存分おいしい空気を吸わせていただいています。

読者のみなさまも深呼吸を！ くれぐれもご健勝で。来年は合唱団の「還暦」です。(健)